

国際共同研究交通費補助 研究成果報告書

(適宜行追加可)

所属・職・氏名	総合政策学部・教授・長峯 純一
共同研究者 所属・職・氏名	国立成功大学・政治系（社会科学院）（台湾） 教授・楊 永年
研究課題	災害の伝承と遺構を活用した防災教育・防災対策のあり方 ー台湾と日本の比較研究を通してー
共同研究 実施期間	派遣期間： 年 月 日 ～ 年 月 日 招聘期間：2026年1月15日～2026年3月31日
共同研究 実施場所	日本・三田市

1. 研究の成果（本共同研究によって得られた新たな知見、成果等を簡潔に記述してください。該当しない場合は「該当なし」と記載してください。）

(1) 学術的価値（本研究により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果）

台湾・国立成功大学の楊永年教授と長峯は、これまで災害被災地の復興や防災対策の方法とその効果について、日本と台湾の被災地を訪問しつつ、とりわけ災害遺構を活用した防災教育や観光復興の可能性に焦点を当てて研究してきた。

今回の共同研究の期間においては、これまでの研究活動や成果・知見を整理・体系化しつつ、災害の記憶を風化させないための災害遺構を生かした伝承方法について、さらに研究を発展させることを意図してきた。これまで研究蓄積を踏まえ、今回の研究成果を簡潔にまとめると、以下の5つ論点に整理することができる。

a.日本の災害伝承事例とそれを扱った先行研究の整理

災害の経験や記憶を思い起こし、それを次の世代へと伝えることは、災害で犠牲になった人々への鎮魂の意味はもちろんであるが、次の災害への備えとして、自分たちのために、そして次の世代のためにという責務にも近い意味がある。そして実際それは様々な形と方法で行われてきており、それぞれの事例において、そこでのストーリーが存在している。災害研究はそうした対象について行われてきた。

b.災害伝承に使われる媒体とその方法の整理と体系化

災害伝承の「媒体」とは、災害の体験や記憶を伝える仲立ちの役割を担うものであるが、語り部のような人に始まり、被災の記憶を遺すための写真・映像・文書等、石碑やさまざまな遺構、ミュージアムのような施設など様々あり、時代と共に変化もしてきている。

そしてこれら媒体を使って、災害を忘れず伝えるための祈念式典や各種イベント、災害体験型イベントやツアー、コンサートや語り部の会等、これも様々な方法・取組みが行われてきた。これらの媒体と方法を組み合わせることで、多種多様な災害伝承の形が生まれてくる。そうした取組みの事例とその影響や効果を整理・体系化することが、研究という視点から可能である。

c.災害伝承の内と外への二つの意味ー被災地域内と被災地域外

災害の経験・記憶を伝える活動には、被災者や被災地域が自分たちで、それを忘れないようにとの自戒の意味を込めたものと、被災者以外・被災地域以外へ災害の経験を伝えることを意図したものと、二つの意味があることに気づかされる。災害伝承の議論をする際には、この二つの意味を認識しつつ、それぞれの目的と役割を考える必要がある。

d.防災活動と復興活動の連続性・一体性

防災のための防災活動や防災教育と被災地の復興は別の問題として議論されるのが一般的である。しかしたとえば、災害遺構を活用して防災教育を進めようと被災地以外から多くの人々が訪れることは、被災地域の経済的な復興にも寄与することになる。逆に、被災地域の復興を目指して観光事業に力を入れることで、たまたまその地域を訪れて災害遺構とストーリーを聴く機会に遭遇することで、防災意識の醸成につながることもある。このように防災と復興とは連続するものであり、またそれを一体的にとらえて活動や取組みを考えていくこと

が重要である。

e.被災地間連携の意義と提案—災害伝承と観光復興の同時推進—

災害遺構を生かした伝承活動による防災教育、被災地への観光客の誘致による観光復興を一体的に進め、さらに災害経験を共有する被災地が連携をすることで、防災と復興の活動をさらに深化したものにすることが期待できる。日本と台湾の災害地域を訪問する中で、類似した地勢的条件と自然災害を経験してきた両国の被災地の間には、共通する災害伝承に活用しうる地域資産があることに気付かされてきた。具体的な事例は後述するが、日本と台湾の国を超えた被災地間連携の意義とその取組み事例の提案を、今回の研究活動の中で推進した。

(2) 相手国との交流（海外の研究者と学術交流することによって得られた効果）

今回の共同研究の成果として、日本と台湾の災害被災地が連携することで災害伝承、防災教育、観光復興の効果をより深化させる可能性を提案した。その具体的な連携事例として以下2つのケースを取り上げた。

一つ目は、阪神淡路大震災の被災地・神戸市（長田区鷹取地区）と台湾・台中地震の被災地・南投県埔里鎮（桃米里）のペーパードーム（紙経堂）を通じた連携の可能性である。神戸市長田区にあった鷹取教会は震災によって破壊・焼失したが、その跡地にペーパードームが建てられ、震災後の10年間、地域の復興拠点として活用されていた。復興事業と教会再建によって10年後にその撤去が決まった際、台湾・台中地震の被災地・埔里鎮で活動してきたNPOの申し出によって、現地の防災復興公園内に2008年に移設・再生され、その後は紙経堂という集会・展示施設として活用されてきた。

埔里鎮は観光復興を目指しているが、現地を訪れる観光客向けツアーの中で神戸市との災害を通じたペーパードームのつながりが伝えられている。しかし神戸市の方では、ペーパードームが台湾に移設され再生されている事実が忘れられつつある。ここでの被災地間連携とは、ペーパードーム（紙経堂）が神戸市から埔里鎮に移設されたという事実を想起し、加えてそれは災害後の復興過程で使われた施設ではあるが、災害（伝承）遺構の一つとして再認識し、日本と台湾の被災地間連携を通して災害伝承に生かしていく意義を考える必要性である。

二つ目の事例は、東日本大震災の被災地・陸前高田市の奇跡の一本松と、台湾・台中地震（1999年）に関連して発生した土砂災害の被災地・南投県竹山鎮（木履寮）の生き残った龍眼の木を通じた被災地間連携の提案である。

竹山鎮木履寮地区は、台中地震で山岳地帯の地盤が緩んだところに、その2年後に虎芝台風（2001年）が襲い、山崩れと土石流によって約100世帯の集落が埋もれ、9人の死者行方不明者が出た。その荒廃した跡地を防災・復興の場にできないかと楊は地域住民たちと話し合いをしてきた。その関係から、長峯・楊が2023年3月に現地フィールドワークを行い、その際に1本の龍眼の木が生き残っていることを発見した。それは陸前高田市の奇跡の一本松を想起させるものであり、龍眼の木も同様に復興や災害伝承のシンボルにし、荒廃地を防災復興公園に整備することを地元関係者（地域住民、行政、議員、研究者等）に提案した。台湾側はその提案に大いに乗り気になり、南投県と陸前高田市の生き残った木を通じた被災地連携の可能性を模索してきた。

その後、2024年3月にもフィールドワークを行い、2024年9月の台湾側代表の陸前高田市への表敬訪問、オンライン4回、対面1回による連携ワークショップを重ね、2025年5月の陸前高田市長らの南投県の表敬訪問と交流シンポジウムへと交流活動を進めてきた。今回の研究期間においては、双方の連携のあり方を整理し、災害伝承と防災教育に生かすための連携活動について具体的な方策を検討した。2026年6月に、長峯・楊で再度、陸前高田市を訪問し、被災地間連携による災害伝承の深化を提案する計画である。

(3) 社会貢献（社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献）

本研究は、災害被災地の復興や防災対策への寄与が研究目的である。その意味では研究活動の過程やその成果がそのまま社会貢献につながるということが出来る。学術価値のところで先述したが、とくに以下の3つの研究成果の観点から社会貢献の意味をもつことを改めて強調しておきたい。

第1に、災害記憶の風化を食い止め、災害伝承の効果をより深化させるための被災地間連携の意義とその方策を提案していること。第2に、別の取組みとしてとらえられがちな災害伝承による防災（防災対策や防災教育）と被災地の復興の両者を一体のものとしてとらえ取り組むことの意義を提案していること。

第3に、災害の伝承には、被災地の人たちが犠牲者への鎮魂と自分たちが災害の記憶を忘れないためとい

う戒めの意味合いと、被災地外の人たちへ災害の経験を伝えるという 2 つの意味合いがあること、そして被災地間連携を通じた伝承活動はその両者の意味を同時に達成する手法になりうることを提案したことである。

いずれの提案もこれまでのアクションリサーチの蓄積の中で考えてきたことではあるが、今回の共同研究の中で「被災地間連携」というキーワードと結び付けてより明確な政策メッセージとして打ち出すことができたと言える。

(4) 若手研究者養成への貢献（若手研究者養成への取り組み、成果）

この件は今回の研究期間内ということではなく、長峯と楊が台湾と日本を対象に研究と交流活動を続けてきた中で生まれた若手研究者養成の成果として記載する。

先述したが、今回の共同研究のテーマに関連して、2023 年 8 月に楊は国立成功大学の学生を引率して本学総合政策学部学生との交流プログラムに参加するため来日した。そのメンバーの中にいた大学院生 A 氏が、その後、宮城県南三陸町の東日本大震災からの復興活動と地域ブランド化をテーマとした修士論文を書き、長峯が審査委員会の副査として参画するということがあった。さらに A 氏は研究の継続を希望し、長峯が東北大学大学院農学研究科の教員を紹介したところ、台湾政府からの奨学金を獲得し博士後期課程の入試に合格し、2026 年 9 月から東北大学の大学院生として被災地の産業復興をテーマに博士論文の執筆に挑戦することになった。

またもう一人、長峯は 2023 年 3 月に本学総合政策学部学生を引率して台湾へフィールドワークに行ったが、そのメンバーの中にいた本学総合政策学部生 B 氏が、卒業後、国立成功大学大学院への進学を希望し、2025 年 9 月から同大学院修士課程での学びを開始していることがある。

これらは共同研究の成果として意図したことでなかったが、台湾と日本の被災地でのフィールドワークを学生を伴いながら実施してきた中で生まれてきた副次的成果と言える。

(5) 将来発展可能性（本研究を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか）

本研究のテーマである災害伝承は、学術的な研究に留まるものでも実践活動に留まるものでもない。本研究でもアクションリサーチと現場での実践活動が並行して進行し、その中でより効果的な手法を試行・模索するという形をとってきた。その意味でこの研究は災害が続く限り継続して発展していく可能性がある。

今回の研究では被災地間連携を提案し、その候補事例を 2 つ挙げたが、そこでの具体的な伝承や防災教育の取り組みや実践活動はまだまだこれからである。一例として、日本と台湾の小中学校における防災教育への導入を提案し、すでに台湾の地元小学校ではその取り組みが始まっている。そうした活動を日本側の被災地、台湾と日本の他の被災地、そして被災地外の学校教育へと広げていく方策、また学校以外での災害伝承活動の方法を考えていくことも必要である。

(6) その他（上記（1）～（5）以外に得られた成果があれば記述してください。）

例：大学間協定の締結、他事業への展開、受賞、産業財産権の出願・取得等

共同研究のこれまで活動の蓄積の結果ではあるが、台湾の南投県竹山鎮木履寮の土砂災害地で見つかった 1 本の龍眼の木を復興・伝承のシンボルにすることを台湾政府に働きかけてきた結果、防災復興公園に整備するという方針だけが決まり、具体的な事業が進んでいなかった現地で、2025 年から予算化が付き、公園整備が急速に進み始め、生き残った龍眼から採取した 100 の苗木を 2026 年 5 月に植樹することが決まっている。こうした現実の取り組みとして成果が出たものがある。

2. 研究発表（本共同研究の一環として発表（予定含む）したものについて記述してください。なお、印刷物がある場合は 1 部添付してください。）

例：共著論文、口頭発表、出版、ポスター発表

ポスター発表：本学大学院総合政策研究科リサーチコンソーシアム（2026 年 5 月 15 日）のポスターセッションにて、「災害伝承と防災教育－日本と台湾の奇跡の木を通じて－」をテーマに長峯・楊の連名で発表。

口頭発表：日本公共政策学会関西支部研究会（2026 年 7 月 4 日、於京都大学大学院人間環境学研究科）にて、「災害遺構による伝承と防災教育」をテーマに長峯・楊の連名で発表予定。

論文等の執筆物は未完成であるが、上記の発表と合わせて執筆中で、2026年度中の刊行予定。